

「今、私の晴雨計は！56」

「平成最後の年明けに思う」

平山征夫

「平成」最後の年が明けた。順番なら「愛唱歌」の続きを書くのだが、30年ぶりに年号が変わるといふ新年最初のエッセイとして相応しいかなと思ひ、またまた横道に逸れることにした。

年末近くに「隠れた富士見の穴場」といふ田貫湖で、終日富士を眺めて過ごした。綺麗な逆さ富士が見られた。元旦と二日には箱根に出かけた。二日は大学対抗箱根駅伝の往路の日、渋滞が予想されたので、それを避けて乙女峠に富士山を見に行った。その時すれ違ったのが東海大のバスだった。

娘に「強いのか」と聞かれ「強いけれど優勝は無理だろうか？」と答えたが、結果は見事大会新で初優勝を飾った。

ことほど予想は難しい。新年の経済予想を色々な評論家がしているが、神様以外は当たるも八卦だ。米中貿易戦争に加え、中間選挙で民主党が下院第一党になり、メキシコの壁の建設費用を含む予算が通らず、一部の政府機能がかつてなく麻痺しているのも不安材料だ。過去の同様の状況の際には財政の壁とか崖とかと呼ばれたが、今回は何と呼ぶのだろう。両党の距離は一層開き、問題の困難度は増している。こういう時の将来予測では大きな流れを見るしかない。政治の流

れでは何よりポピュリズムによる「自国第一主義」が「国際主義」を放逐しようとしていることだ。移民問題がその象徴だが、問題の本源は多くの時代そうだったように「経済」にある。経済成長が鈍化し、しかも富が上位1%（ないし10%）に集中し格差が拡大、貧困が広がっている。こうした経済状況を脱する政策がみつからないので自国を守る保護政策に走る。それまでの「新自由主義」と「グローバリゼーション」に基づく自由貿易による市場拡大経済成長と言う政策とは明らかに異なる。

自国第一主義による保護貿易が何をもたらすかは、第一次大戦後世界恐慌を経て第二次大戦に

至った歴史を振り返れば明らかだ。本年は同じ道に踏み込むかどうかという重要な年に思えてならない。確かに「新自由主義」も「グローバリゼーション」も私たちに平穏と幸福を齎しはしなかった。IT技術の進歩で生活は一変、情報の取得、ネット売買等、明らかに便利になったが、一方で地方の商店街では一層シャッター街化が進んだ。通勤電車で皆が本を読んでいた風景が、スマホをいじる風景に代わったのを見ると、人類の文明は進歩しているのか疑ってしまう。

AI技術が第四次産業革命を起こし時代変化を加速すると予想されている。AIは「多くの人々を失業させる」か「人類を労

働から解放するの」か議論されて
いるが、「技術進歩が何を齎すか
ではなくて、どういう人類社会を
作ってゆくのか、それに必要な技
術は何か」と発想すべきではない
だろうか。核開発でもそうだった
が、新たな技術に向き合うと、そ
れが人々の人生を豊かにし、人々
を幸福にするかという判断より、
国益や企業利益から導入してし
まう。「核の平和利用」という美
名が「核兵器保有能力」と同義で
あることは最早自明だが、現在の
AIの主導権争いも同じにしか
見えない。

齎されたのだろうか。政治は成
長しにくくなった資本主義の下
で、人びとにどうやって幸福を与
えようとしているのか。自国で生
きてゆきたいはずの人々が危険
を冒して次々と移民しなくては
ならないのは何故か。移民受け入
れの是非が議論されているが、そ
の根因である途上国の貧困や非
民主主義問題はあまり議論され
ない。新年早々こんな怒りが込み
上げてきたが、ニュースに出てく
る世界のリーダーを見てみると、
「無理だな」と絶望してしまう。
資本主義という社会システムが
行き詰まり、AIという人類史上
最大かもしれない技術進化が進
む時に、どんな新たな社会システ
ムを作るべきかという課題に真

っ向から取り組むリーダーは見
えない。世界恐慌と大戦を受けて
戦後ブレトンウッズ体制を構築
したように、リーマンショックの
後で「金融資本主義」の見直しを
含めて協議すべきだったのだら
う。
残念ながら将来に希望を持てる
年明けとは言えない。国際主義を
前提とした自国主義はまだしも、
国際主義を捨て去るような自国
主義の蔓延には、人々はもつと敏
感に反応する必要がある。第一次
大戦後、「不戦条約」という平和
を希求する倫理感の高揚に対し、
モンロー主義の巻き返しで、アメ
リカが非加入となり国際連盟が
十分な機能を発揮できず、自国主
義の衝突を調整出来なかった。

同じようにトランプ大統領の元
でWTOはじめパリ協定（CO₂排
出抑制）、イラク制裁協定などに
アメリカが不参加・脱退し骨抜き
化が進んでいる。トランプ大統領
の国際連合嫌いは有名だが、二国
間協議で有利に自国主義を貫こ
うとするやり方は、国家間の利害
が直に衝突し紛争に発展しやす
く要注意だ。
私が以前から唱えていること
が在る。ここまで地球環境・水・
資源問題が深刻化している状況
で、自国主義が蔓延するのはまず
い。CO₂の管理、サハリンの天然ガ
スや貴重金属等の活用、新エネル
ギーの開発、海水を廉価に真水に
替える技術開発、砂漠の緑化、食
糧の新たな増産方法などについ

て「地球と人類のサステイナブルのための特別事業」と定め、これらについては「人類共通の重要テーマとして総力を挙げて取り組み、その成果は共通に還元利用し、人類皆が生き延びよう」という考

えだ。その運営・管理は国際連合を中心に行うことで、その存在意義を取り戻すと同時に地球の危機は人類共通だから、皆で協力して乗り切る「国際主義」の精神を広げてゆく運動にもなると考えたのだが、年寄りの単なる初夢だろうか。

もうひとつ「ずっと人類は戦争をしてきたが何故だろう」と考えた。「このままなら武器の進歩で人類は滅びるだろう」「AIロボット軍が人間を殺戮することに

なりかねない」などの想像が浮かんできた。どうすれば愚かな人類の戦争の歴史を終わらせることが出来るのかもっと考えなくては分からない。良い考えが浮かんだら初夢の続きとして書こう。

砂漠の「緑化」と書いて思い浮かんだ初夢がある。知事時代、県民運動として「二十一世紀の二〇〇年間新潟県民は木を植えて、二〇世紀に失った緑を取り戻そう」という「いがた緑百年物語」運動を始めた。私が現在運動のため通っている新潟市のビッグスワンの一階には「二〇〇一年の県民から二一〇一年の県民へ」というタイムカプセルが設置されている。私も「二〇〇一年の新潟県知事より」ということで一文を入

れている。カプセルのデザインは公募から選ばれた若い人達の絵だが、当時五歳の子が二人選ばれている。この二人は一〇五歳まで生きればカプセルを開けるのに立ち会える。

この運動で私がやりたかったが未だ出来ていないものに「命の森建設―16本の木を植える」運動がある。それは人口の爆発的増加は、呼吸で人々が吐き出すCO₂も地球温暖化に影響するが、京都議定書以来の国際協定にカウントされていない。成人一人が吐き出すCO₂を帳消しにするには成木16本が必要(光合成機能)。それなら新潟県民は16本の植樹をして地球に負荷をかけないようにしたらどうか、それも毎年一本、

小学校入学時から大学卒業までの16年間で植えたらどうだろう。「故郷を離れていても自分の呼吸を賄う命の森が故郷にあるというのは、いつまでも繋がっている証しになる」と考えたのだ。

しかし、未だこの運動は実施されていない。そして、以前お袋にこの話をした時「オラも死ぬ前に16本植えたい」と言っていたのを思い出した。昭和19年生まれの私は今年75歳になるが、今から16本植えると丁度90歳になる。「そうだ。まず自分らが卒寿を指して生きようという想いを込めて「卒寿の森」建設運動をやったら良いのだ」という想いが浮かんだ。希望者はそこで樹木葬してもらっても良いし、結構意義の

ある運動かもしれない。場所をどうしようか、一〇〇人参加で一六〇〇本、一〇〇〇人なら一六〇〇

さ、意外さに驚きながら楽しんだ。やっと明るい新年になった。

〇本の森だ。呼びかけ対象、費用

(平成31年1月31日)

はどうするか、など考えていたら

正月休暇は終わってしまった。ち

よっと壮大だが、これを単なる初

夢に終わらせるか目下思案中。

新潟市ではこれまで「新春三大

美術展」が開かれていたが今年は

なかった。都市力の低下を反映し

ているようで寂しい。代わりでも

ないが、来年三月で閉店が決まっ

ている新潟三越で開かれていた

「田中達也見立ての世界—ミニ

チュアライフ展」を見てきた。ブ

ロッコリーが木になったり、クロ

ワッサンが雲になったり、畳が畑

になったり、見立ての発想の豊か

